

# 大東 BOOKS

第9号 2009年6月30日

新図書館長挨拶	1
図書館からのお知らせ	3
視聴覚ホール リニューアルオープン	4
ウィーンのオッソリネウム展	6

## 新 図 書 館 長 挨 拶

五味 俊樹 (法学部政治学科教授)

前図書館長の柴田善雅教授によって創刊された電子ジャーナル『大東 BOOKS』は、本号をもって九回の号を重ねることになった。今年度から館長を仰せつかった私が今後、これを維持・発展させていくことができるのか、正直に申せばあまり自信はない。近年、多くのジャーナルが休刊や廃刊を余儀なくされている中で、同じ道を辿らぬように最善を尽くすつもりである。4月1日の就任からすでに約3ヶ月も経ち、いまさら就任の挨拶もないではないか、といった批判の矢がすぐにでも飛んで来そうである。そうしたことも承知のうえであえてこの場を借り、私なりの大学図書館への思いを綴らせていただくことにする。

たしか10年以上前のことになるだろうか。今は亡き文芸評論家の江藤淳氏がある新聞の対談において読書の意義を熱く語っていた。私はなぜかそれをおぼろげながら憶えている。江藤氏が述べられたことを私なりに咀嚼して記せば、おおむねつぎのとおりである。

ひとりの人間が一生のうちで実際に経験できることは非常に限られている。しかし、私たちが本に親しめばさまざまな書籍を通して、いろいろな人生を疑似体験することができ、世界の歴史、地理、文化、社会などにふれて視野を広げることも可能となる。その意味で書物は人間の想像力を無限に膨らませてくれるすばらしい贈り物である。

この指摘は目から鱗が落ちる類のものではない。私たちはそれを無意識のうちに理解して本を読んでいるのであろう。本をこよなく愛する人びとにとってはむしろ当然すぎる話

かもしれない。ところが、日本に限らず世界全体が若い世代を中心にして、いわゆる「活字離れ」（より正確には、「文字離れ」）の傾向にある。そして、今日、交通手段が飛躍的に発達したとはいえ、「ひとりの人間が一生のうちで実際に経験できることは非常に限られている」のは紛れもない事実である。そうであればこそ、本を読むことによって私たちはあえてさまざまな所へ出かけなくともいろいろな人や事物と出会い、知性や感性に磨きをかけることの素晴らしさを改めて認識すべきであろう。きわめて逆説的ではあるが、今日ほど本の重要性や価値が求められている時代はないように思われる。

ところで、書籍といえば、すぐに「文字」を連想しがちである。しかし、漫画、絵画集、写真集なども書籍であることに変わりはない。「読書のススメ」といった場合、そこには、大半が「文字」で埋め尽くされている本を読むべし、という意味が暗に籠められている。それ自体に異を唱えるつもりは毛頭ないが、「文字文化」への過度の信仰は、「知性」ないし「知識」の偏重に陥る危険性を多分に孕んでいる。画像であれ、映像であれ、さらには音響であれ、そうした媒体を通して、私たちは「感性」ないし「感情」の世界の素晴らしさにふれることができる。

したがって、大学図書館のあるべき姿として、書籍や雑誌の中で「文字」媒体が中心に位置することは多言を要しない。しかし、画像、映像、音響といった媒体を所蔵することについて、過度に排除する理由を見出すのは困難である。幸運にも、今年の6月に東松山図書館のA.V.ホールが改装され、全国の他の大学図書館に類をみない立派な視聴覚ホールに生まれ変わった。本学の図書館が提供しうる「文字」媒体以外の機能として、A.V.ホールを積極的に活用したいというのが、私の基本的スタンスである。

今日、どこの図書館もやや大袈裟な言い方をすれば、歴史の大きな岐路に立たされている。電子媒体の爆発的普及によって、電子書籍や電子雑誌が増えつつある。従来の紙ベースのものが電子ベースに取って替わられる日が到来するのであろうか。遠い将来のことは神のみぞ知るところである。しかし、近未来において図書館が大きく変わらざるをえないことだけはたしかである。現に、出版業界が電子化の荒波によって揺れに揺れている。図書館も舵取りを誤れば、その荒波の中で転覆する虞さえある。大東文化大学の「図書館丸」が電子化という荒海で転覆・沈没しないためにも、適切な操舵方法を見出す必要がある。電子化の流れは不可逆的であると思われる。ただし、この分野における技術はまさに日進月歩で変化する。完全に電子化の波に乗ってしまった場合、取り返しのつかない事態に遭遇する可能性もないわけではない。そこで、そうしたリスクを回避するために、現在のところ、電子化の急速な環境変化を注視しながら、紙ベースと電子ベースとのハイブリッド化を柔軟に行っていくことが肝要であろう。

大学にとって図書館は教育・研究活動を支える「黒衣」のような存在である。大学の主役が学生および教職員であることはいうまでもない。したがって、私に与えられた使命は「黒衣」として、主役のパフォーマンスを高めることにあると考えている。

## 図書館からのお知らせ

### ◆前期試験のための延長等

- ・前期試験のため、土曜日の開館時間を延長します。  
前期試験の利用者のために7月4日から7月25日までの7月4日、11日、18日、25日の各土曜日の開館時間を延長し、閉館時間を18時30分とします。
- ・前期試験のため、「グループ学習室」を開放します。  
普通は予約して使用している「グループ学習室」を試験勉強のための座席として利用してください。利用可能な期間は掲示します。

### ◆オープンキャンパス

2009年度「オープンキャンパス」に伴い下記の日時に開館いたします。

- ・東松山キャンパス：7/19(日)、7/26(日)、8/29(土)
  - ・板橋キャンパス：7/12(日)、9/13(日)、9/22(振替休日)
- ※開館時間：オープンキャンパス時間内、館内閲覧のみ

### ◆夏季休暇中の開館・休館について

夏季休暇中の開館・休館は下記のとおりになります

- ・開館時間は平日9時～17時、土曜日9時～12時。  
8月の土曜日及び一斉休暇日は休館となります。  
詳細は開館カレンダーをご覧ください。
- ・夏季休暇中は長期貸出をします。  
長い休みの利用のために、7月21日から長期貸出をします。  
返却日は10月1日(木)です。ご利用ください。

### ◆図書館資料の複写

図書館では、サービスの一環として図書資料の複写のためにコピー機を設置していますが、図書や論文を全部コピーすることは著作権法違反となります。ご注意ください。

### ◆板橋中央棟・図書館より

#### ・蔵書点検

下記の期間開館をしておりますが、蔵書点検を実施いたしますので騒音等でご迷惑をおかけすることもあるかとおもいますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

蔵書点検実施日：8月20日(木)～21(金)、24日(月)～28日(金)、31日(月)、  
9月1日(火)

---

## 視聴覚ホール リニューアルオープン

### (東松山キャンパス「60周年記念図書館」)

---

- AVホール リニューアルオープンセレモニーを7月17日開催します。12:00～  
講演会演題：「大東文化大学図書館の伝統と競争力」柴田善雅（前館長）

東松山図書館の視聴覚ホールは、図書館建設（1986年）後約23年が経過し、諸機器類及びホール等老朽化が著しく、またデジタル化に対応していないために、改修工事を実施し、今までの「視聴覚ホールからニューメディア対応の多目的ホール」へと様相を変え、本年6月に新しく生まれ変わりました。

- ・座席数 130席、220インチ、16:9、ハイビジョンの大画面
- ・臨場感あふれるサラウンド音響；5.1Chサラウンド
- ・利用目的に合わせたスピーカーの選択
- ・利用目的に合わせて選択可能な画面表示（1画面・2画面）
- ・バリアフリー対応（車イスの利用）
- ・次世代の映像機器、音響機器に対応した設計

『光の変化による3つの空間演出 その1』

■ラーニング・モード：授業

■スピーチ・モード：講演会、研究発表会



【PCを活用した授業や講演会に適した音響と高画質の実現】

- ・PCやハイビジョン映像を活用した授業支援
- ・音声専用スピーカーによる聞き取りやすい音声
- ・プロジェクターの2画面表示による効果的授業運用

『光の変化による3つの空間演出 その2』

■シアター・モード;迫力ある映像・音響



【フルハイビジョンによる高画質と5.1Chサラウンドによる高音質】

- ・高画質・高音質の視聴覚資料に最適な環境を実現
- ・最新のメディアにも対応

『光の変化による3つの空間演出 その3』

■ステージ・モード;ミニ・コンサート



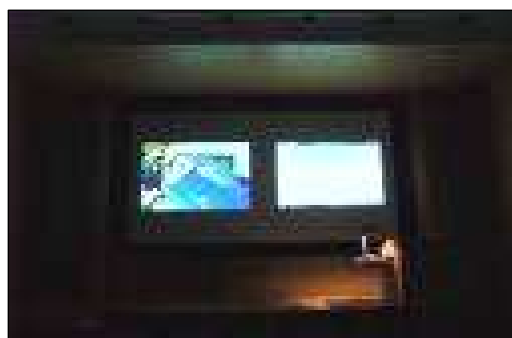
【ホール前半の可動式座席を移動するとフラットなステージが出現】

- ・ミニコンサート、ミニステージとして利用可能
- ・パネル・ディスカッション、公演会

### 『その他の特徴』



可動式座席



2画面表示の写真



プロジェクター投影

---

---

## ウィーンのおツソリネウム展

山根雄一郎（法学部政治学科教授）

---

---

2009年2月27日から3月29日まで、ウィーン市中心部のリング大通りに面して建つ旧ハプスブルク王宮の一角を占めるオーストリア国立図書館において、「ポーランドの歴史的至宝」と銘打つ展示会が行われた。ポーランド南西部の都市ヴロツワフに所在する研究機関オツソリネウム（Ossolineum）のコレクションが、オーストリアの首都ウィーンに出張展示されたのである。図書館相互の研究交流や所蔵資料を活用した啓蒙活動はそれ自体として珍しいものではないが、本企画においては、両国の現職大統領が後援者として名前を連ねている点に、格別の意義がアピールされているようにも見える。

小文では、日本では一般には知られていないと思われるオツソリネウムと、そのコレクションが21世紀のウィーンで展示されるに至る歴史的経緯について、紹介してみたい。以下の文章は、展示会場で無料配布されていたドイツ語による解説プリント（A4判2枚に

両面印刷。筆者不明。ポーランド語版と英語版もあった)の内容の約7割を日本語に移したものである。なお、地名は原文ではほぼ一貫してドイツ語名だが、文脈を考慮して他言語名に変更したり、説明抜きに頻出する年号にもそれと思しき歴史的背景を補足説明したりするなど、随所に改変を施したため、厳密な対訳になってはいないことをお断りしておく。

1795年、いわゆる第三次ポーランド分割がロシア、プロイセン、オーストリアの手で行われ、ポーランドはヨーロッパの地図上から消滅する。1817年にポーランド人貴族ヨゼフ・マクシミリアン・オッソリンスキ伯(Józef Maksymilian Graf Ossoliński, 1748-1826)の設立したオッソリンスキ民族研究所(設立者にちなんでラテン語で「オッソリネウム」と称される)は、こうした情勢下で重大な役割を担うことになる。世界で唯一のポーランド文化の研究機関として、オッソリネウムが広めた諸思想こそは、ポーランド人が不自由を強いられた諸時代を持ちこたえる糧となり、1918年には独立の獲得という成果に結びついたのであった。当研究所は、ナチスドイツとスターリンの率いるソヴィエト連邦とによって国土が侵された第二次世界大戦中も活動を続け、冷戦後には共産主義体制の解体に貢献した。現在はウクライナ領となったリヴィウ(旧ポーランド領ルヴフ、ドイツ語名レンベルク)から、第二次世界大戦の結果ポーランドに帰属したヴロツワフ(旧ドイツ領ブレスラウ)への本拠地の移転も乗り切った。何よりもこのような連続性のうちに、ポーランド人の記憶の場所としてのオッソリネウムの特別な意義があるのである。

その設立の経緯はこうである。学者にして情熱的な愛書家、収集家、翻訳家であったオッソリンスキ伯は1817年、ポーランド文化の運命への憂慮から、ポーランドの歴史・文学・言語にまつわる至宝を保存するための研究機関を設立する試みに着手した。彼はウィーン帝室図書館の宮廷館員のち館長(在職1809-1826)として、学術の発展ならびに民族的伝統の保護にとって図書館のコレクションがもつ意味をよく心得ていた。こうした関心の方向に呼応して、彼の構想する文化研究機関は、図書館機能と出版局機能と博物館機能を互いに結合すべきものとされた。

1817年6月4日付の財団設立手続によってオッソリンスキは民族研究所に対するオーストリア皇帝の賛同を取り付け、自分の蔵書や手書き文書類や美術館級の芸術作品の数々をこの施設に委譲した。1823年12月25日にオッソリンスキとヘンリク・ルボミルスキ侯(Fürst Henryk Lubomirski)との間に交わされた合意によって、オッソリネウムは、同侯のきわめて充実した個人コレクションをルボミルスキ博物館として擁することになった。

オッソリンスキは研究所の本拠として、1795年以来ハプスブルク領ガリツィア＝ロドメリア王国の首府となったレンベルク市を選んだ。1817年にポーランド語ポーランド文学講座を伴って大学が再建された同市は、オッソリンスキには、その意図を実現するために最適の場所に映ったのである。彼が研究所の入居先として選定したのは以前のカルメル会女子修道院であった。ところがオッソリンスキ伯が民族研究所の開所に立ち会うことはついになかった。彼は1826年にウィーンで没したのだった。研究所に寄贈された彼のコ

レクションの数々は、その死の一年後にレンベルクに移送された。

オッソリンスキ民族研究所は 1827 年にレンベルクで活動を開始した。この活動を支えたのがオッソリンスキ伯のコレクションであり、26182 点の印刷物、708 点の手書き文書類、2000 点の銅版画、1128 点の硬貨、224 点の地図、1184 点の鉱物ならびに貝類が、研究所に寄贈されていたのである。ルボミルスキ侯は 1827 年に研究所の文献部門の理事職を引き受けた。研究所の初代所長にはフランチシェク・シャルチンスキ主任司祭（Pfarrer Franciszek Siarczyński, 在職 1827-1829）が任ぜられた。その後継者であるコンスタンティ・スウォトフィンスキ（Konstanty Słotwiński, 在職 1831-1834）のもとで閲覧室と印刷所が開設され、印刷所では 1832 年このかたガリツィアとブコヴィナの行政公文書の製造が行われた。

印刷所はそのほかにも愛郷主義的な刊行物や非合法の雑誌の類を制作していたため、操業停止処分を受け、研究所の定期刊行物の発行認可は取り消され、それとともに閲覧室と研究所も閉鎖された。オッソリネウムが定期刊行物を発行する可能性をあらためて手にしたのはようやく 1841 年になってからのことである。1847 年に印刷所は操業を再開することができ、閲覧室は 1848 年に訪問者に対して再び公開された。1854 年から 1865 年にかけて研究所は、学術上ならびに出版活動上の意義のほか、経済的な安定を取り戻した。

プロイセンとの戦争に敗れた後、ハプスブルク帝国はオーストリア＝ハンガリー二重帝国に再編され、オーストリア国家内部での諸改革の枠組のなかで、1868 年から 1873 年にかけて、ガリツィア王国には幅広い自治が認められた。その結果、諸大学や諸学校やオッソリネウムといった数々の文化的施設が栄えた。ガリツィアはハプスブルク帝国の帝室直轄領となった。（州都レンベルクは、州語とされたポーランド語ではルヴフという。）1868 年から 1870 年にかけてルボミルスキ博物館はさらに広範囲の公衆に開放された。1878 年から 1918 年までオッソリネウムはポーランド語による学校教科書の刊行認可を得ていた。遺言で指定された寄贈を絶えず受け入れた当研究所の意義は、コレクションが中断なく拡張し続けたことで、19 世紀を通じて増大したのである。

第一次世界大戦の結果、ハプスブルク帝国は瓦解し、1918 年 11 月 11 日、ポーランドは 123 年にわたる外国による支配の末に独立を回復した。オッソリネウムはルヴフで活動を継続し、1920 年から 1922 年にかけて印刷物の刊行団体ならびに展示会場として重要な役割を獲得した。独ソ両国によるポーランド侵攻の始まった 1939 年 9 月以降、研究所に運び込まれる愛書家や美術館のコレクションが激増し出した。オッソリネウムならそれらを戦災から保護することができるだろうという、人々の信頼が寄せられたのだった。

1939 年 9 月にルヴフがウクライナ・ソヴィエト共和国（ソ連の一部）の手中に帰した後、ルボミルスキ博物館は解体され、そのコレクションは同地のさまざまな博物館・美術館に分散させられ、出版部門は閉鎖された。1940 年から 1941 年の間、オッソリネウムはソヴィエト科学アカデミーのリヴィウ図書館分館であった。それは 1941 年から 1944 年まで、この地を占領したナチス＝ドイツの支配下に置かれ、レンベルク国立図書館に併合された。



1944年の初めには、ドイツ文化の見地から有意義であるとされたコレクションの一部の疎開が行われた。2298点の手書き文書類、2198点の古文書、1707点の初期刊本、2371点の銅版画のほか硬貨やメダルといった、計り知れぬ価値をもつ一切合財が、二度の輸送でクラクフに運ばれ、同地のヤギェウォ図書館で保管された。

ドイツの当局者はコレクションをドイツ本土にまで輸送することを決めていたので、1944年、それらはまた搬出された。ところが、これらの品々は低地シュレージエン地方に送り返され、戦後になってそこでポーランド人住民によって発見されたのである。

低地シュレージエン（低地シロンスク）地方は、ドイツが降伏した1945年以後、ドイツ領から切り離されポーランドに帰属することになったので、発見された品々は低地シロンスクの州都ヴロツワフに留め置かれた。また同時に、ルヴフはウクライナの都市リヴィウとなったため、そこに残されていたもとのオッソリネウムのコレクションは、今やステファニク国立学術図書館に属することとなり、ウクライナの所有へと移行したのであった。

低地シロンスクで発見されたコレクションはヴロツワフに運ばれた。1945年このかた、問題のコレクションを構成する品々をめぐって、ヴロツワフとリヴィウの間で粘り強い交渉が始まった。リヴィウにはコレクション全体のおよそ60パーセントが残されたままであり、そのなかには定期刊行物コレクションの全部と美術品コレクションのほぼ全部が含まれていたのだが、ヴロツワフは1946年と1947年の間に、ウクライナがポーランドに返還した品々をさらに取り戻したのである。それは、7068点の手書き文書類と41505点の初期刊本を含む、217450冊に及ぶ書籍類であった。

ソ連の影響のもとでポーランド人民共和国を樹立して全権を掌握した共産党の為政者たちは、この研究所が貴族に起源をもつことを隠蔽しようとした。コレクションを全ポーランドの図書館や博物館に分散させようとしたのはそのためであった。ポーランドの知的エリートたちはこの動きに激しく抵抗したので、品々は結局ヴロツワフに残されることとされ、以前の修道院の建物に運び込まれた。すでに1947年には、そこで閲覧室の運営を再開することができた。1953年にオッソリンスキ民族研究所はポーランド科学アカデミーに統合され、図書館部門と出版部門が二つの独立の組織へと分割された。

1989年にポーランドはソヴィエトの支配から解放され、ヨーロッパの一独立国となった。レンベルク以来の伝統の記憶は、1990年から1994年にかけて、財団としての資格を再び取得することを可能にした。オッソリネウム所長代理アドルフ・ユズヴェンコ博士（Dr. Adolf Juzwenko）は、ヴロツワフの学界と政界の支持を得て、オッソリネウムを公法上の財団として旧に復そうとしたのである。1995年1月5日、彼の努力は見事に結実した。

1817年にオッソリンスキによってウィーンに設立された研究所は、今日ではポーランドにおける最も重要な文化施設のひとつであり、そのコレクション総数は190万点に達する。

当研究所はポーランド人をめぐる記憶の場所として通っている。この場所の運命は、中央ヨーロッパ東部でのさまざまな出来事のうちに埋め込まれているのである。オッソリネウムが収集した記録文書や芸術作品は、一民族の歴史を物語ると同時に、ヨーロッパのこ

の一带の歴史をも例証することになる。基礎をなしているのは、オツソリンスキ伯とルボミルスキ侯という研究所の創設者たちのコレクションである。それを構成している書物や手書き文書類や絵画や素描や銅版画や硬貨やメダルや武具の数々が、図書館であって博物館でもある性格を当研究所に与えているわけだが、当研究所が記憶の場所として確立したのは、実にこうした性格によるところが大きいのである。

オツソリンスキ自身がすでに「財団設立手続」の追加文書で、設立される図書館への寄贈を同胞に呼びかけていた。オツソリネウムは全ポーランド人の民族的な研究機関であったから、彼の呼びかけは、オーストリアとロシアとプロイセンとに分割された地域に生活していたポーランド人にだけでなく、世界中に散在していた広範なポーランド人大衆にも届いた。国家主権が失われた状況に直面して、この研究機関がポーランド文化の維持にとって鍵となる役割を果たすであろうことを人々は知っていた。芸術と文学こそが、民族のアイデンティティの維持をめぐる闘争における最重要の武器であることが実証された。オツソリネウムは、ヨーロッパとの結びつきを作り出すことを可能にする基盤となった。

ポーランド人はみずからのアイデンティティを自文化の偉大な作品と結びつけるとともにヨーロッパ文化の偉大な作品とも結びつけた。そのため、オツソリネウムには、ポーランド文化の生んだ最も優れた作品だけでなく、ヨーロッパ文化の至宝も収められている。ポーランド人にとっての記憶の場所としての当研究所は、このような次第で、同時にヨーロッパ人にとっての記憶の場所としても機能しているわけである。

以上でオツソリネウムの紹介を終える。ヨーロッパ世界のほぼ中央に位置するウィーンのも、しかも創設者オツソリンスキ伯が館長を務めたハプスブルク宮廷図書館の後身であるオーストリア国立図書館の一角で、オツソリネウムのコレクションが公開されることの意義は、おのずから明らかだろう。中央ヨーロッパの国際関係の荒波を潜り抜けてきたオツソリネウムの軌跡は、図書館事業が担う文化（遺産）の維持継承のはたらきという、日頃気づかれることの多くない一面に、あらためて注意を促すもののように思われる。

---

---

大東文化大学図書館報『大東 BOOKS』	
第9号	2009年6月30日刊行
編集発行人	五味俊樹
連絡先	大東文化大学図書館事務部図書課
住所	〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
電話	(03) 5399-7331
Email	<a href="mailto:lib-all@ic.daito.ac.jp">lib-all@ic.daito.ac.jp</a>